

[研究報告]

1995年 9月

若い世代から見た 銀座とハイライフ

財団法人 ハイライフ研究所

Symposium of Ginza & Hi-Life

Table of Contents

はじめに	3
開催日程	5
個人プロフィール	7
シンポジウム	
「若い世代から見た銀座とハイライフ」	21
第一回	22
第二回	25
第三回	30
第四回	35
銀座イメージマップ	41

Ginza & Hi Life

はじめに

—研究の背景と目的—

銀座のはじまりと銀座煉瓦街計画

銀座を歩くと気持ちがいい。建物のデザインもさることながら、歩道の敷石や街路灯、そして並木も手入れが行き届いている。やはり他の商店街とは格が違うということは誰もが感じることだろう。

銀座の歴史をひもとくと、いまの銀座の繁栄は“銀座煉瓦街計画”なしにはあり得なかったことが分かる。江戸時代の銀座は、今よりはずっと狭い地域の呼称であり淋しい町だった。繁栄の中心はむしろ日本橋方面にあり、そのころの銀座には商家が並んでいた。

明治五年の大火をきっかけに“銀座煉瓦街計画”が起こる。政府はいったん銀座の土地を全部手に入れて、銀座を首都東京の玄関に相応しいものに再建した。明治十年に完了した時、銀座の町は道路が拡大され、すべての建物を煉瓦か石でつくった不燃かつヨーロッパ風の町に変容した。

憧れの街「銀座」

こうして国家権力によって造られた銀座は、その後市民の憧れの街となった。流行歌に多く歌われ、映画やテレビにも多く登場した。モダンボーイ・モダンガールは銀座に繰り出した。そこは、本当の大人が遊べる街でもあった。

その頃の銀座は、市民にとって、まさに先端の流行や文化を担う街であり、西洋の匂いに浸ることができる場所であった。そして当時のある種のハイライフを、擬似的にでも体験できる場所であったと云えよう。

「銀座」のイメージ・「ハイライフ」のイメージ

それでは、今の銀座の姿はどうであろうか。世代によってもかなりそのイメージは異なると思われるが、中でも若い世代から見た銀座のイメージ、そしてハイライフのイメージを探ることがこの研究のはじめの問題設定であった。銀座の街は今でも我々のハイライフの実現を支えてくれるのだろうか。また、渋谷や新宿と比べてどのようなイメージを持たれ、またどのように利用されているのか。一体、銀座経由の「ハイライフ像」は今でもあるのだろうか。

アンケートでは分からない

このような問題設定を前提に研究を進めるにあたって、若い世代の正直なありのままの銀座像を引き出すことが、どうしたらできるかということ考えた。我々はまず、紙面によるアンケート方式では、ありきたりの銀座のイメージ—高級な、古い町、整然とした、など—しか得られないと考えた。我々が求めているのは、そういった万人が共通にもつ、一般解としてのイメージではなく、個人それぞれの主張であり、生の声である。それは必ずしも皆に共通のものでなくてもよい。個人の価値観は様々あって良いのだから。

シンポジウムを開催する

そこで、20代半ばから30代前半の、これからの時代を担うであろう若い世代に集ってもらい、自由に議論をする場を設けた。人選にあたっては、日頃から都市や街に興味を持ち、独自の価値観を持っているだろうとされる人を選んだ。また、各人の専門領域はなるべく重ならず、広範囲に渡るように考慮した。

仕事上のつながりも何もない者どうしが銀座に集い、「銀座のイメージ」「豊かな生活」について、忌憚のない意見が交換されることを期待して、シンポジウムを開催した。

個人の意見を重視

従って、本報告書の内容は決して一般解を記述したものではなく、あくまでも個人レベルの意見にとどまっている。ここから、現代の若い世代の「銀座像」の全体を読むことはできないが、ある部分集合の意見や価値観に関する生の声が記述されている。



開催日程

—シンポジウムの足どり—

- 第一回シンポジウム 1994年11月4日
「銀座カルチャーの行く末」

- 第二回シンポジウム 1994年11月24日
「僕らが求めるハイライフ像」

- フィールドワーク 1994年12月上旬

- 第三回シンポジウム 1994年12月26日
「銀座経由で考えるハイライフ」

- 第四回シンポジウム 1995年2月2日
「私の銀座ストーリー」

若い世代から見た
銀座とハイライフプロジェクト
メンバーリスト

報告書作成

研究代表	橋本都子	日本女子大学大学院 博士課程後期 — 構成・編集担当
	渡辺朗子	慶応大学 環境情報研究所研究員 日本女子大学大学院 博士課程後期
	式地香織	日本女子大学大学院 家政学研究科修士課程
	鈴木陽子	慶応大学大学院 環境情報研究科修士課程

シンポジウム参加

	伊地知寛博	科学技術庁 科学技術政策研究所 科学技術特別研究員
	小田展弘	森ビル株式会社 文化事業部
	角館政英	(株) ライティングプランナーズアソシエーツ
	掛井秀一	鹿島建設株式会社 技術研究所 研究員
	佐々木龍郎	(有) トータルリビング一級建築士事務所 代表取締役
	西澤立衛	(株) 妹島和世建築設計事務所
	広田光一	東京大学大学院 工学部機械情報学科
ゲスト	長谷川文雄	東北芸術工科大学 教授
	前田博	(財) 環境文化研究所 研究員
	島田一郎	株式会社フォルマ 代表取締役
	白石伸生	GINZA DIAMOND SHIRAIISHI 代表取締役社長

*Symposium
of Ginza
& Hi-Life*

個人プロフィール
Self-introduction



Self-introduction



い じ ち と も ひ ろ
伊地知 寛博
Ijichi Tomohiro

科学技術関係の
研究所に勤務する
学術博士

Voice

研究開発マネジメントや政策サービスに関する研究をやっている。また、新しい情報や新しい知識を生み出していく人や組織、そういったハイクオリティーなものの構造やプロセスを、明らかにしていくという研究も行っている。

Self-introduction



おだ のぶひろ
小田 展弘
Oda Nobuhiro

不動産関係の都市計画・
都心住宅の研究に携わる
六本木「文化副都心構想」など

Voice

不動産業の企画畑にいて、都心住宅の基礎研究を行う傍ら、文化事業の運営を行っている。六本木を中心に例えばどんな文化施設を入れればよいか等の検討も行う。最近では、マルチ・メディア関係のシンポジウムも企画する。

Self-introduction



かけい ひでかず
掛井 秀一
Kakei Hidekazu

建設業関係の
技術研究所に勤務
ヴァーチャル・リアリティー
を専門とする

Voice

今は、知覚ということに興味を持っている。例えば、ネットワークの中での空間性と身体を動かすことで知覚する空間性の問題。一対多の中でのネットワークの時代に、空間性を持たないネットワークがあり得るのだろうか。以前はフィジカルな空間に興味があったが、今はそういうヴァーチャルな空間に興味を持つ。

Self-introduction



かくだて まさひで
角館 政英
Kakudate Masahide

照明デザイン事務所
に勤務する
都市の景観照明や光環境、
インテリアデザインを手がける

Voice

街や都市の光環境に関する設計協議をやっている。
港北や多摩の集合住宅地、東京フロンティア等に
携わる。また、インテリアの設計も行う。

Self-introduction



さ さ き た つ ろ う
佐々木 龍郎
Sasaki Tatsuro

建築設計事務所を主催する
住宅・工場・道路の
デザインを手がける

Voice

30年間東京に住んでいる。幼稚園は渋谷。小・中・高は飯田橋に通う。母は新宿の伊勢丹、父は渋谷の西武、祖父は日本橋の三越が好きで、僕にとっての銀座は、実は掛け落ちている街である。銀座に来たのは、友人とルーマニア料理を食べに来たのが最初。今は、洋服を買いに来ることが多い。

Self-introduction



しきち かおり
式地 香織
Sikichi Kaori

住居学を専攻する
大学院一年

Voice

卒業制作は「銀座における集住建築」というテーマで行った。
題名は「There is No Place Like z Home」ということで、翻訳すれば「住めば都」。生活者の前向きな姿勢やひたむきなたくましさを表現している言葉だと考える。これは、たまたま銀座という場所設定であって、銀座は私にとって、住宅以外のdwellingスペースを、要素として持ち得るだと考えている。

Self-introduction



すずき ようこ
鈴木 陽子
Suzuki Yoko

住居学を専攻したのち
環境情報学科へ進学
大学院一年

Voice

卒業論文は、銀座を対象として「都市のイメージを構成する要素」について書いた。今までの私の中の銀座は、日比谷方面が中心だった。テニスをしたりバイトをしたり、お昼を食べに来るところとして利用していた。

Self-introduction



にしざわ りゅうえ
西澤 立衛
Nisizawa Ryue

建築設計事務所に
勤務する

Voice

銀座っていわれてもほとんど知らない。友達が設計した画廊に行ったことがあるくらい。機能的に分化されていて、パリやロンドンがモデルになったという印象ですね。

Self-introduction



はしもと くにこ
橋本 都子
Hashimoto Kuniko

大学院博士課程
空間心理学を専攻する

Voice

銀座はよく買い物に来る街です。晴れた日にウィンドウショッピングしながら散歩をする街としても好き。特に休日よりも平日の銀座が好きです。

Self-introduction



ひろた こういち
広田 光一
Hirota Kouichi

研究者

専門はヴァーチャルリアリティー、
コンピューターグラフィック

Voice

自分自身は銀座にはあまりなじみがない。歩き回る場所としては、自分は銀座はつまらないと思う。自分が良く行くのは秋葉原や神田の本屋街。あそこは歩くための街とはいえないが、モノが売っていて歩いていてすごく楽しい。

Self-introduction



わたなべ あきこ
渡邊 朗子
Watanabe Akiko

大学院博士課程
住宅と情報化社会について
研究を行う

Voice

専門は住居学から始めて、その後建築に進んだ。
サイバー空間と物理的な空間を生活空間というく
くりで捉え直して、研究を進めている。

Guests

シンポジウム第三回



はせがわ ふみお
長谷川 文雄
Hasegawa Fumio
大学教授
専門は都市情報環境



まえだ ひろし
前田 博
Maeda Hiroshi
都市計画系の
研究所に勤務
専門は都市再開発

Guests

シンポジウム第四回



しまだ いちろう
島田 一郎

Shimada Ichirou

デザイン事務所を主催
トータルデザインから
イベントプロデュースまで
幅広く手がける




しらいし のぶお
白石 伸生

Shiraishi Nobuo

銀座で宝石店を経営
大学4年に在学する

*Symposium
of Ginza
& Hi-Life*

シンポジウム
「若い世代からみた銀座とハイライフ」





シンポジウム開催にあたって

テーマ

「若い世代から見た銀座とハイライフ」

「銀座」は常に、時代のハイ・ライフやハイ・カルチャーのリーディング・スポットとして存在し続けてきた街であろう。銀座を歩けば、あらゆる趣味のよいモノを手に入れることができ、豊かな生活に酔いしれる体験ができる。

しかし、最近では、特にモノの消費が生活の豊かさを満足させるという構図が描けなくなってきている。これからの「豊かさをはかるバロメーター」はモノの所有度だけでなく、自己表現の充実度やコミュニケーション領域の拡大がより強く求められることであろう。

物の売買を中心とした商店街として栄えてきた銀座も、モノに代わる新しいカルチャーとしての「街の手法」を見つけない限り、これからの時代のハイ・ライフのリーディング・スポットとして存在し続けて行くことは難しくなるであろう。

若者は、何を規範として「way of Hi-Life」のビジョンを描くのか。何をもって「豊かな生活」と感じているのか。これらの論点について明確にしていくことを目的に、シンポジウムを開催した。

こうしたプロセスから、若者の欲する銀座カルチャーの未来像を浮かび上げらせ、次世代のハイライフ像を、できるだけクリアに示したいと考える。

1 シンポジウム 第一回

The Symposium of Ginza & Hi-Life

subject

銀座カルチャーの行く末

銀座という街は、今の自分たちの生活にどのように関わっているのだろうか。また、関わっていないならばそれは何故か。そして、日頃から銀座に対してどのようなイメージやニーズを持っているのか。それは他の都市と比較してどうなのか。

シンポジウムの第一歩として、これらの銀座に対するイメージや位置づけ、メンバー自身が自らの体験記やライフスタイルを語ることを目的に、第一回目は「銀座カルチャーの行く末」というテーマで議論を行った。

若い世代のニーズと銀座

舶来文化を発信してきた街 **Suzuki**

銀座といって連想するものは、上質で良質なものを築いてきた街であり、舶来文化を発信してきた場所ということ。高級なモノを手にすることで、得ることができた「ハイ」な気分を、銀座は提供してきた街だろう。

「銀座」という特殊性はまだあるのか **Kakei**

「銀座ブランド」という捉えられ方が、今もあるのかどうかは疑問である。銀座にはもう集積の意味は全くなくなっていると思う。また、ハイライフが上質であるかという話もそうではなくて、ハイライフの“ハイ”というのはどういう意味かということ、自分の気持ち“ハイ”になるということではないかと思う。

生活のニーズを満たしてくれない *Oda*

例えば、演劇を観てから食事をしようとしても、銀座のお店はほとんどもう閉まっている。「あれをしてから、これ」という要求を満たしてくれるのが都会だと思っていたが、銀座はそのニーズを満たしてくれない。夜遅い時間に行動がシフトしてきた今、夜の早い銀座は、段々若い人の生活に合わなくなってきているのではないだろうか。

銀座の街の体験記

歩行者天国を初体験 *Kakudate*

子供の頃、銀座で初めて「歩行者天国」というものを体験して、「なんて道って気持ちいいんだろう！」と感動した。

歩く楽しさを持っている街 *Watanabe*

銀座は歩ける距離で色々な施設があって、街の中に楽しさが凝縮されている。N.Y. との類似性を感じる。

銀座の領域と表と裏 *Sasaki*

ごみごみした路地は、銀座の化粧をしていない顔。そういう銀座の表と裏、そして昼と夜にみられる、ON-OFFの切り替えがはっきりしていて、非常にわかりやすい街だと思う。

銀座と渋谷

Ijichi

例えば、渋谷では店それぞれが個性を持っているし、「渋谷カジ」という言葉を生み出すようなエネルギーが渋谷にはある。しかし、今の銀座はみな店が同じようになってしまい、それが銀座をつまらなくしている。

銀座の範囲

Kakudate

私の銀座に対するイメージは、一つには銀座というテリトリーがよく分からないということ。自分は小さいときから新宿に住んでいて、バスで行く新橋のガード下から高島屋の方までが私の中の銀座である。しかし、みんなはどこを銀座と呼んでいるのか分からない。

銀座のテリトリー性

Sasaki

街を歩いているとき、銀座のテリトリー性を強く感じる。銀座はあるものすごい密度で色々なものが集まっている街だという印象を受ける。渋谷みたいに店がだらだらと続いていて、いつの間にか原宿になるというのは、また少し違う。

summary

まとめ

Hashimoto

銀座ブランドはもはや死語ではないか、という否定的な意見から始まった議論も、各々の個人的な銀座の体験記を話すうちに、銀座に対する各自のイメージが浮かび上がってきた。

かつての銀座が満たしていた、舶来文化に触れたり、高級品を手にするという欲求は、現代の若者にとってはごく当たり前のこととなり、またそれは銀座だけにある価値でもなくなった。

そうした中で、過去の銀座のイメージを話すのではなく、これからの銀座にどうなってもらいたいのか、について話すことが有益であり、また議論も楽しいものにするという手応えをつかみ、第一回を終了した。

2 シンポジウム 第二回

The Symposium of Ginza & Hi-Life

subject

僕らが求めるハイライフ像

“ハイライフ”と言ったときに何を連想するか。また、豊かな生活とは各人にとってどういうものなのか。自分の生活の中で充実感を感じるときはどんなときであるか。

“ハイライフ”という言葉を通して、銀座の街を見たときに、一体なにが見えるだろうか。前回の“銀座”についての議論をさらに深め、またハイライフ像についても併せて議論がされるように、テーマ設定を行った。

共通するイメージとしてのハイライフ

時間の自由度

Hirota

豊かさとは何かと考えたときに、時間等が自由に使えることではないかと思う。時間に限らず自由度の大きさが豊かさに大きく関係していると思う。

ハイライフといっても言葉を知らない

Nishizawa

そもそもハイライフという言葉を知らなかった。おそらくハイクオリティー・ライフのことではないかと思う。アメリカでいうアメリカンドリームに相当する言葉とも考えられる。

銀座はもはやハイライフの最終地点ではない **Oda**

若いときに六本木を通過して、最終的には銀座の街で遊ぶという図式が少し前にはあったかも知れないが、今はそうじゃないと思う。銀座には中途半端な夜の街が内包されていて、国際的な街でもない。例えば六本木の方が国際的だと思う。以前ほどハイライフの最終地点というイメージは銀座は薄れてしまっている。

銀座に見られる人の魅力 **Watanabe**

自分は日常生活を考えると、仕事でもプライベートでも、そして街を見るときでもそうだけど、人が重要である。銀座を見ていて人が面白いと感じたことは少ない。

メンバーさえ揃えばどこでもいい **Kakei**

ハイライフを街ということにつなげようとする、自分には少し無理がある。例えばネットワークを組んで情報をやりとりしていても、その情報を得られたから楽しいのではなく、そのメディアを通じて向こう側にいる人間となにか面白いことができたことが、自分にとっては嬉しいし楽しい。要するに、メンバーさえ揃えばどこでもいいと思う。街や建築は、もうそれほど影響力を持つことはできなくなっているのではないだろうか。

マ イ ラ イ フ を 語 ろ う

生活とはあくまでも個人のものである **Sasaki**

率直な感想として、生活自体に「ハイ」を付けるというのは好ましくない。ハイに対してはロウがあり、それはヒエラルキーになっているが、生活にそういうヒエラルキーをつけるというのは相当古くさい発想。生活とはあくまでも個人のもので、自分が生きていること、それでしかない。それに階層をつけようとする、自体がナンセンス。

■ 楽しければそれがハイライフ *Kakei*

ハイライフというと楽しければいいと思う。それは結果が上手くいくと楽しいというのではなく、そこへ行くまでのプロセスが楽しければ、それが自分にとってのハイライフ。効率や能率ではなく、自分がそのプロセスの中でどれだけ楽しめたかということが重要。

■ 自分の軸を持っていること *Hashimoto*

自分が何をやりたいのかがきちんと分かっていて、自分の軸をきちんと持っていること、それが充実した生活に、ひいてはハイライフにつながるのではないかと考える。自分の生活は、そのひと個人のものであり、他人と比較できるものではない。そういう意味で、自分の軸をきちんと持っていることが、強い生きたかをできる人だと思う。

■ 自分の得意分野を生かせること *Ijichi*

色々な機会を選択できて、やりたいと思うことに対して不本意なことが起こらないこと。誰でも自分の得意とする分野があるが、その得意分野を生かして仕事につなげていけることが自分にとっては嬉しいのではないかと考える。自分のやりたいことに対して障害が少ないこと、それがハイライフかも知れない。

■ イメージに圧倒されない生活 *Nisizawa*

注意しなければいけないのは、ハイライフやアメリカンドリームというイメージに占拠されてしまうこと。特に、建築をやっているとイメージというものは馬鹿にできない。イメージに占拠されてしまったらもうそれ以外の形式ではものが考えられなくなったり、それ以外の方法があるんだということを言えなくなってしまう。そういう様に、イメージに占拠されてしまうことが自分にとっては一番怖い。だから、ハイライフとか言葉とか若者という言葉に対して、批判的であるべきだと思う。

■ 枠組みの設定と自己実現

Oda

自分で設定した枠組みの中で、ある程度のプレッシャーを感じながら、クリアすることができるハードルを設定できて、その土俵で自己実現を果たせる生き方。例えば大仁田厚のような生き方は、ある意味でのハイライフを実践していると思う。

■ 考え方に余裕が持てるような状態

Kakei

成長、進歩、向上というようなものは、私には全くない。だから、何か新しい物が出てきたときに、それが飢餓感を持って自分には足りないと考えるのではなく、新しい物が出てきたときに「これがあつたら楽しいな」と思えるような、そういう余裕が持てる状態が、その人のハイライフだという気がする。

■ 自分の生き方の仮説が評価されること

Hirota

生活をしていく上で、自分で選択したことは、何かその裏で自分が持つ仮説が働いていると思う。その自分の生き方に対して持つ仮説が評価されて行くことが、充実感につながるのではないかと考える。

初めの話題は、皆のもつイメージとしての“ハイライフ像”についてであった。しかし、“ライフ”とはそもそも極めて個人的なものであり、誰かとイメージとして共有するものではない、という意見が出たあとは、話のモードはハイライフからマイライフへと切り替わった。

その後は、各個人が抱くハイライフ（マイライフ）像を話すなかで、それぞれの価値観が、よりはっきりと見えてきた。

また、銀座に“ハイライフ”があるのかという問いに対しては、否定的な意見が多かった。今の若者が求めるものや生活の充実感を感じるきっかけは、「街」にはなく、むしろ「人」の方が重要であるということであった。

様々な人との「知識の共有」、またそのことによる「自己の変革」が精神的な充実感につながること、そして「結果」ではなくそこまでの「過程（プロセス）」が自分にとっては重要である、などの意見が出された。

3 シンポジウム 第三回

The Symposium of Ginza & Hi-Life

subject

銀座経由で考えるハイライフ

三グループに分かれて銀座の街をフィールドワークした後の第三回目のシンポジウムは、長谷川文雄さんと前田博さんのお二人のゲストを迎えて、銀座経由でのハイライフについて考えた。

フィールドワークの感想も交えて、イメージとしての銀座から、街を歩いて肌で感じた銀座まで、銀座そしてハイライフについての議論をさらに深めた。

知識としての銀座・経験としての銀座

知識としての銀座

Kakei

映画に出てくる銀座のシーンには必ず和光が映っている。多くの人が、銀座のシンボルは和光だと思っているが、それは知識としての銀座である。自分の銀座を考えると少し違う気がする。大体、和光で買い物をしたことは一度もない。銀座＝和光というのは、知識としてのものであって、自分の経験ではない。

銀座という名前の特殊性

Suzuki

実際に、シンポジウムのメンバーで銀座を歩いてみて感じたのは、銀座という名前の特殊性だった。銀座という街は、その名前自身が持つ意味をひきずっているけれども、実態が伴っていないと感じた。

プロセスに介在できない街

Watanabe

秋葉原と違って、銀座には完成されたモノが陳列されている。銀座はものを作る過程（プロセス）に介在できない場所だと思う。しかし今の私は、何か組み立てたりアセンブリーすることに興味がある。だから銀座を歩いていると、自分がそのプロセスに入っていけないという苛立ちを感じる。

文化が染み着いた名前

Kakudate

日曜日の銀座は裏通りの店がほとんど閉まっている。結局、わざわざその店に買いに来る人を、対象しているのだと思う。親子代々その店のスーツを着て、またそこに作りに行くという。銀座という名前は、今まで私たちが思っていた「銀座」とは違った、技術や文化が持続して、染み着いた名前であるという印象を受けた。

銀座のシナリオに入っていけない

Kakudate

銀座という街が自分の生活のスタイルに合っていない、言い換えると、銀座のシナリオに入っていけない、ということを感じる。自分のスタイルに合っていないから、自分とラップする部分を見つけられない。だから、銀座を歩いている、またここに来ようと思わない。

自分の言葉では語れない境地

自分の視野に入っていない部分

Hirota

今の生活からひとつ上を見てハイライフというならば、向上心があれば、ハイライフには常に到達できる。しかし、僕のイメージでは少し違って、見えない範囲というものがあるのではないかと思う。もしかしたら、見えていないけれども、銀座に足を運びたいような生活があるのかも知れない。でもそれが見えない。見えていないと目指しようがない。そういう部分も含めてハイライフを考えなければいけないと思う。

■ 今の生活の価値観では語れないものもある *Maeda*

ライフスタイルは価値観であり、価値観をどう設定するかがライフスタイルだという意見もある。一言で言えばそうだが、ハイライフにしても非常に個人的なもので、一人ひとり価値観は違う。ところが、今の生活の価値観では語れるものではない、次のstep upした、今の自分には分からないものもあると思う。

自 分 の 目 指 す ハ イ ラ イ フ

■ それは極めて個人的なもの *Sasaki*

快適とは、つまりマイライフ。私の生活を、ここでこうやっていくのが気持ちいいとか。そしてハイライフとは、何かもっとそこから抜け出ていくこと。今の自分から一歩冒険してみたい、そういう感情が個人的にはハイライフというのではないかと考えている。

■ 今と違った状態になっていくこと *Sasaki*

今の自分から一歩抜け出して、違う自分になることを喚起する要素。それが一体どれだけ都市や生活に転がっているのか、ということが面白い。違う自分になるときに、ハイの方向だけではなく、ロウに変わることもあり得る。その危険性が逆にスリリングでいいと思う。

■ 銀座との違和感

Maeda

みなさんは銀座との距離というか違和感を感じている。銀座とどうも一体化できないと考えている。その違和感の質をなるべくかき集めて、どんな風に違和感があるのか、何故銀座には他の都市と違って違和感を感じるのか、などについて整理してみると面白い。

■ 個人論としてのハイライフ

Hasegawa

今回の研究は、都市とかハイライフとか非常に抽象度の高い研究であるから、全体の意見の平均をとってもバラツキが多すぎて一般的なことはなかなか言えないだろう。だからこそ、みなさんのような一人一人の意見を、そのバックグラウンドを明らかにした上で明らかにしたい。日常生活でこんな仕事をして、こんな環境にいる人がこんな風に思っている。そこが知りたいと思う。

今回の議論で明らかになったのは、まず「知識」としての銀座と「経験」としての銀座があるということであった。それと同様に「知識」としてのハイライフと「自分の目指す」ハイライフもあるように感じられた。

たしかなことは、ハイライフもマイライフも極めて個人的なことであり、今の自分から一歩冒険してみたい、そういったポジティブな感情が、ハイライフにつながるということであった。

その場合、ハイの方向に変わることもロウの方向に変わるも、両方ある。しかし、今と違った状態になっていくこと、そのプロセスを「ハイ」と感じている、という結論だったようである。

また一方では、向上心があっても見えていなければ、自分の視野に入っていなければ目指しようがない、という意見も出た。そのような、自分の言葉では語れない境地の存在を認めることも、ライフスタイルや価値観を話すうえで忘れてはならない視点であろう。

4 シンポジウム 第四回

The Symposium of Ginza & Hi-Life

subject

私の銀座ストーリー

自分の中の銀座の地図はどうなっているのか。各自のイメージを“銀座イメージマップ”として描いてもらい、プレゼンテーションを行った。また、併せてこれからの銀座にどうなってもらいたいのか、自分だったら銀座でどのように過ごしたいのか。これらについて話を進めた。

さらにゲストとして、京橋で生まれ育ち銀座が生活圏であった、島田一郎さん、現在銀座にお店を構えている、白石伸生さんのお二人を迎え、銀座人としての意見もお話しいただいた。

銀座について考えたこと

交詢社は銀座の理想イメージ *Ijichi*

僕自身が銀座を場所としてこうあったらいいと思うのは、交詢社。「よくわからない」というイメージだが、建物が古く何か閉じられていて、普通の生活とは切り離された、秩序だった何かを感じる。ある種のステータスを持った成人が、単に時間を無駄に過ごすのではなく、ポジティブに生きている。そういった人達と語りながら、次に何かするための鋭気を養っている、そういうイメージがある。

「良い街」のイメージ *Sasaki*

良い街とは「古いことを大切に、今のことを正確に理解し、新しい所に至る」ということではないか。それは、人間やハイライフでも同じことで、自分の生きてきた部分を大切に、今の自分の状態をきちんと理解し、それから先に進もうとすること。それが一番幸せな生活だと思う。

銀座を歩いていても、何となく自分の街ではないと思う。昔の女性像に対しては、ある程度答えてあげている懐の深さが、以前の銀座にはあったらうけど、今の働く女性に対して、欲望に優しく答えられるかという、疑問に思う。それは、時間が早く閉まってしまうというような単純な問題かも知れない。子供を連れて安心してショッピングが楽しめるという、街の仕掛けがまだ十分ではないと思う。

銀座という街の人達が、何を考えているのか、街をどうするのか、そういうことが見えるような何かを、僕たちは求めていると思う。そういうものが銀座にあればいい。銀座の価値とか銀座が目立つということは、今後相当難しいと思う。銀座が目立てば他の街ももっと目立ってきて、その繰り返しになると思う。

街を面白くするのは人々の活動だ

空間というのはなかなか動かないものだけど、時として時間で区切ったり、あるいはその中に人が集まると、全く違う何かが起こるという楽しさがある。空間がもともと持っている銀座の質を失わないで、新しい見方で変えられるのは、やはり人々の活動だと思う。

銀座にはもっと情報を適当に置いておけるスペースがあるといい。それは本でもいいし、チラシでもいいし、人が居てもいい。「銀座は今こうなっている」ということが分かる場所。「かけ込み寺」のような、何でも集まってくる場所。

■ 会うことが重要

Sasaki

「集まる」ということで、僕は絶対に人と本当に、生で会うということ以上の集まりはないと思う。目的なんかなくたっていい、会うことが目的だ、そういうコミュニケーションが最近どんどん減ってきている。

■ 民主的な形で参加できる組織

Watanabe

銀座を守っていく若い人たち、外部の人たち、そして若い人たちだけでなく都市に関わる全ての人達が、ある程度民主的な形で参加できるような、作っている過程が見えるような組織や場所づくりが、いま求められているのではないだろうか。

■ デイバートする空間装置が必要

Shimada

以前から言っていることだが、銀座クラブのようなものをいち早く作った方がいいと思う。みんなで集まって、それぞれが何を考えて、何をやろうとしているのかを戦わす場が必要だと思う。日本はこういう複数の割と珍しいメンバーが集まってデイバートする場すら持っていない。積極的にこういう形でデイバートをする空間装置がもし仮に銀座にできたら、やっぱりさすが銀座だということになる。

■ 銀座の長所を伸ばしたい

Shiraishi

今でも銀座は一流の街ではあるが、いい点悪い点は実際ある。いい点を伸ばしていければ、銀座の客層ももう少し幅広くなると思う。今日参加して本当に良かったと思うのは、ここまで銀座の空間のことをいろいろと考えたことが無かった。みなさんが提案されているような話を、是非銀座の一商人として実践していけたらと思う。

■ 銀座には特殊なイメージがある

Shimada

皆さんのスタディーを聞いていて、やはり銀座というのは、皆さんの世代も我々の世代も非常に特殊なイメージがあると感じた。平たく言えば“高級”であるとか“プレステージ”ということ。商売をする人が最終的には銀座で成功したというイメージを持つ。そういう意味で、いわゆる“最高の”という冠がつくようなイメージは今でもひきずっている。

シンポジウムも最終回を迎え、各自の議論もクリアになってきた。

いまの銀座に求められているのは、まず銀座という街がこれからどうしたいと思っているのか、何を考えているのかということ、地元の人達が示すことであろう。また、これらについて外部の人も含めて考えることによって、街は創造に溢れた、さらに魅力ある空間になるであろう。

そして、我々シンポジウムに参加したメンバーも、そのような思考の場所（例えば銀座について考えるという）を求めていたのである。

四回のシンポジウムを通して、我々は「銀座」そして「ハイライフ」について考えるというプロセスの中で、互いの意見に触発され、それぞれが自己の枠を広げ、変革を果たした様に思われた。

シンポジウムを終えて感じたことは、このような「街」について議論をする場所や機会が、いま我々のまわりにはないこと、また、そうした場所が求められているということであった。

銀座についてよそ者である我々も、「話をする場」さえあったら、色々考える、また銀座の地元人を交えることによって、その議論もより活気のあるものとなった。

また、たった四回のシンポジウムから、ハイライフ像や銀座像の結論を出すにはすこし早すぎる様にも思われた。この集会在さらに五回、六回と続けば、まだ様々な意見が出されたことであろう。


ハイライフ像については、ライフとは極めて個人的なものであるということ、従って皆が共通して抱くイメージではなく、各個人のマイライフについて語ろうということであった。そして、今の自分から一歩冒険してみたい、そうしたポジティブな感情がハイライフにつながるということであり、より精神的な充実感が重視されるようであった。

銀座については、街をつくるための思考の場の設定とプロセスの共有、そして情報の公開が求められていた。銀座の人達が何を考えて、この街をどうしたいと思っているのかが知りたい、そして自分たちも一緒に考えたい、このような意見が出された。

さらに、四回目のシンポジウムの最後に出た意見としては、「集まってディベートする空間装置」が銀座に求められている、ということであった。例えば「銀座倶楽部」を設置して、誰もが民主的な形で参加できる組織をつくるのも一案であろう。銀座はいまこうなっているということが分かる場所、作っている過程が見えるような組織や場所づくりが、いま若い世代に求められているといえよう。

*Symposium
of Ginza
& Hi-Life*

銀座イメージマップ



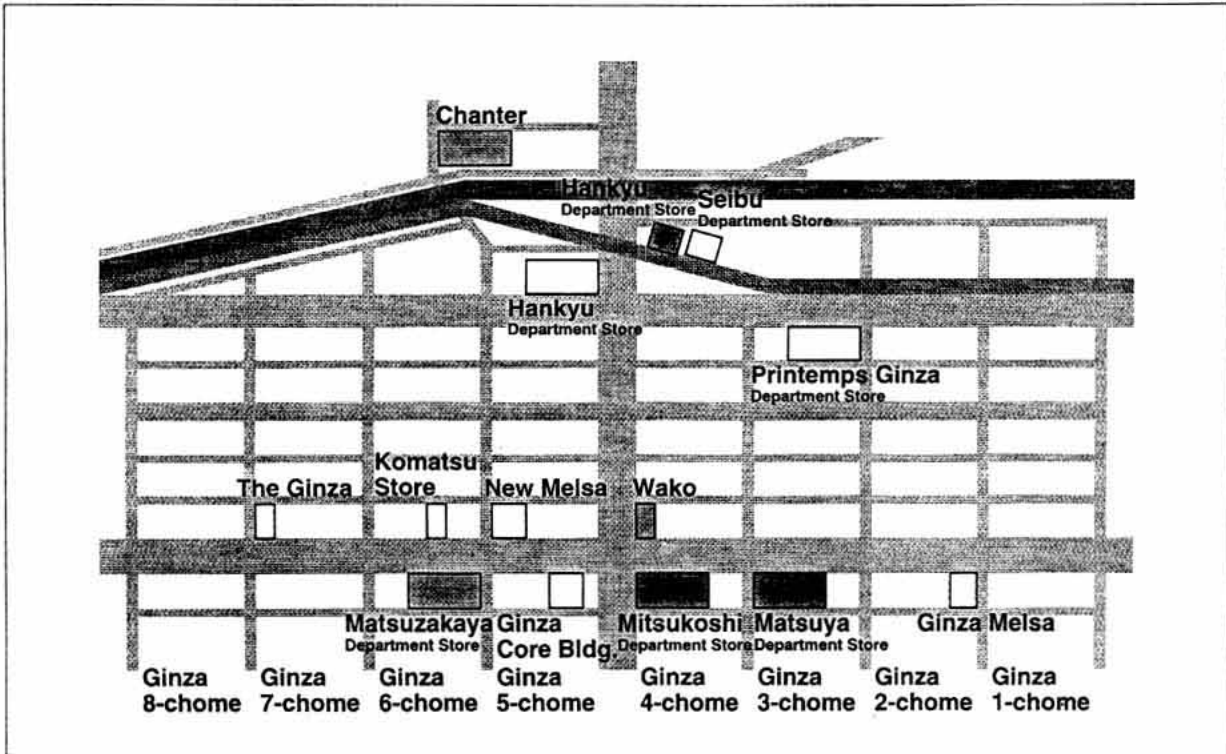


図1 利用されない街としての「銀座」(伊地知)

「自分が身につけたいと思う洋服を扱っているみせがない。
紳士服の選択肢の幅が少ない。」

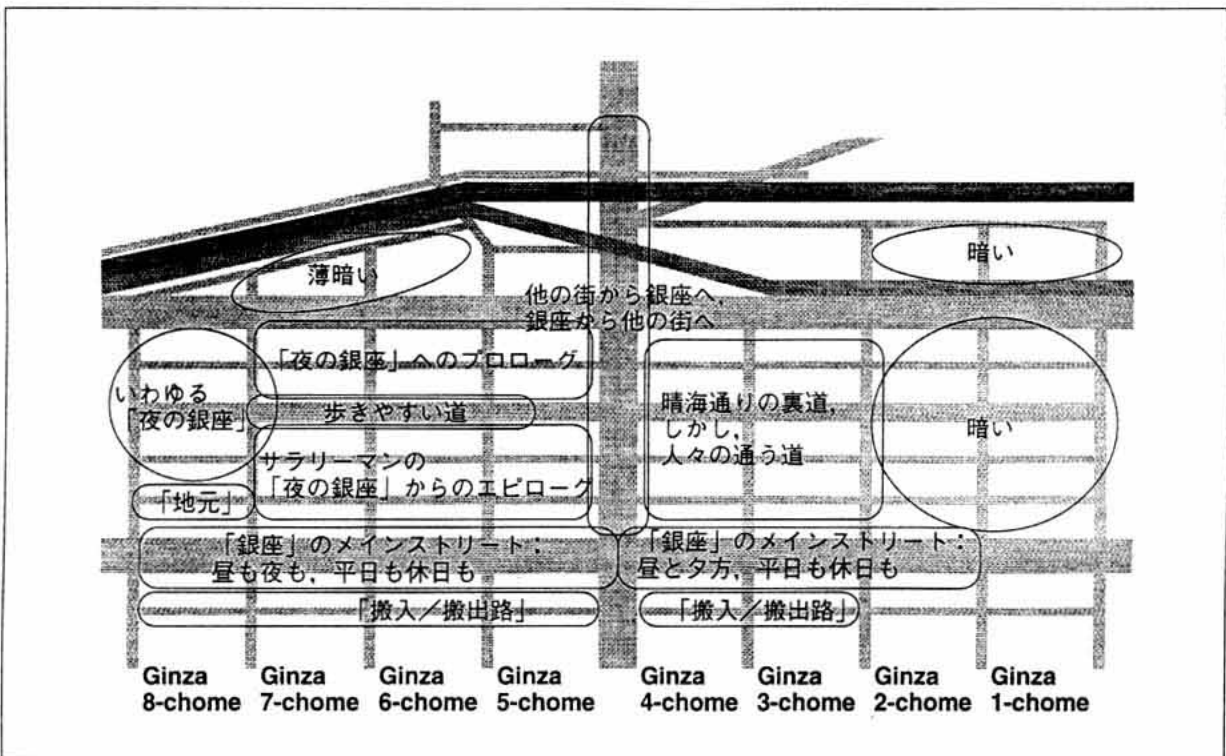


図2 安心して歩ける街としての「銀座」(伊地知)

「歩きながらタバコを吸っている人が少なく、地下街や歩道で安心して歩ける街だと思う。例えば、渋谷はタバコを吸いながら歩く人が本当に多く、歩きながら非常に神経を使う。」

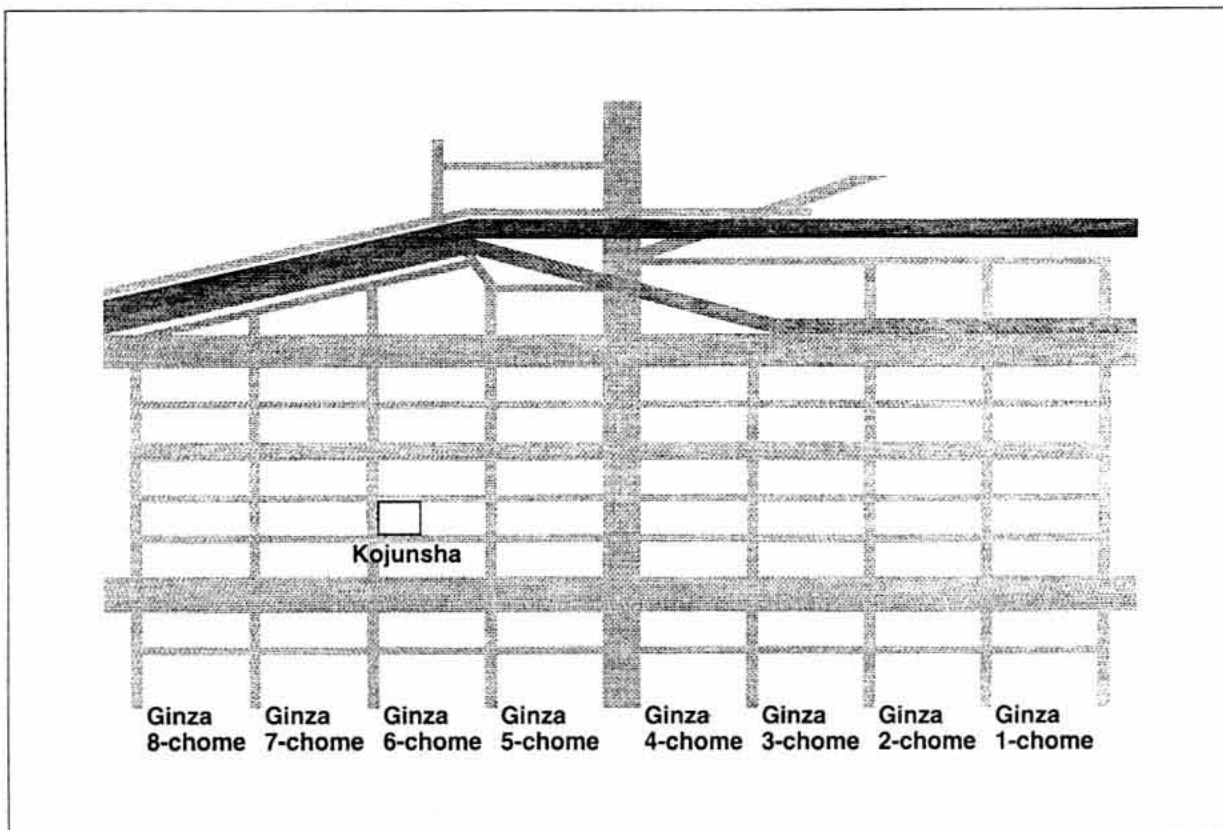


図3 こうあったらいいなと思う銀座の場所（伊地知）

「交詢社の中はよくわからないけれども、建物の古さからして歴史がある。
普通の生活とは切り離された、秩序だった何かがあるように感じる。」

銀座Field Workで感じたことは・・・

○シャッターが切れない

銀座の写真を撮ろうとして何を撮ればいいのか、わからなかった。和光だろうか、三越だろうか、ソニー・プラだろうか。何を撮っても、自分にとっての銀座ではないような気がする。それはビデオでも同じことであろう。

○机上の街

映画に出てくる銀座のシーンでは必ず和光が映っているということだが、自分にとって銀座を銀座たらしめているのは和光であると言えるのだろうか。和光が出てくれば、そこが銀座だということはわかるが、それはパリに行ったことがなくても、エッフェル塔を見ればパリだとわかると言うのと同じで、単なる知識に過ぎないのではないか。和光から連想される銀座は、まったく属人化されていない。

○どこが銀座か

自分にとっての銀座は伊東屋から資生堂パーラーまでの銀座通りと銀座四丁目からマリオンまでの晴海通りで構成されている。飛び地的に帝国ホテルが含まれる。しかも、銀座は新宿や渋谷と隣接している。

○経験される街

カメラを構えて銀座を歩いてみても、銀座を感じる事ができなかった。以前、平日の勤務時間中に銀座を通りかかった時も、そこは銀座ではないような気がした。自分にとっての銀座は、休日に自分の意志が介在することなく体験される街である。それが自分と銀座の関係である。

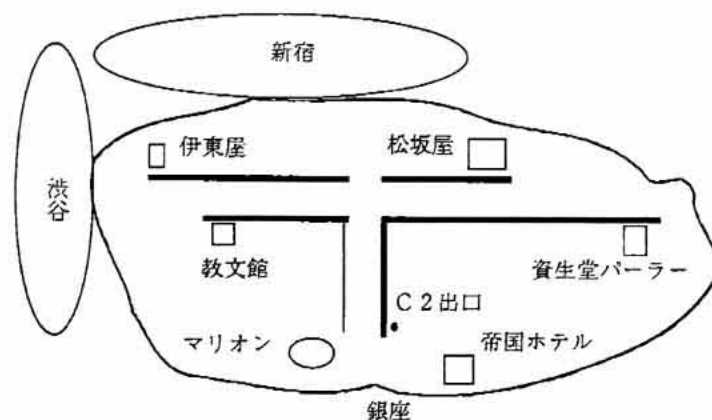


図4 休みの日にわざわざ来る街としての「銀座」(掛井)

「自分の銀座はこの辺しかない。銀座にはイベント性を持たせて、わざわざ出てくる。自分にとってポイントとなるお店はこれくらいで、後のほかのお店は、僕にとってはそれが銀座にあるのか、新宿にあるのかというのは、全く意味をなしていない。」

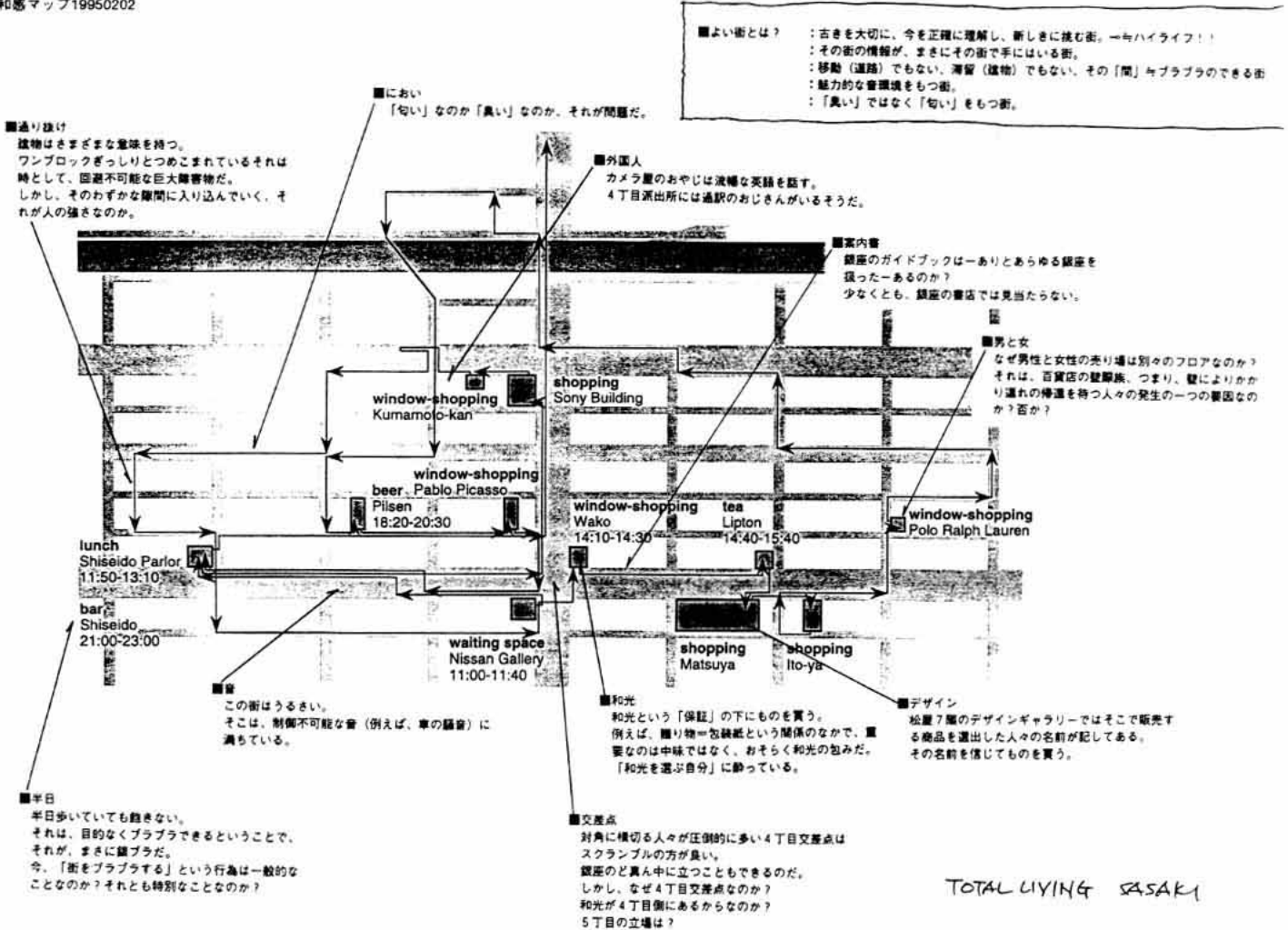


図5 銀座の街に対して不思議に思っていること (佐々木)

「この街は移動と滞留しかない。道があって、道から出るときには必ず建物の中に入らなくてはならない。『いらっしゃいませ』という言葉聞かなければ絶対に道から逃れられることはできない。」

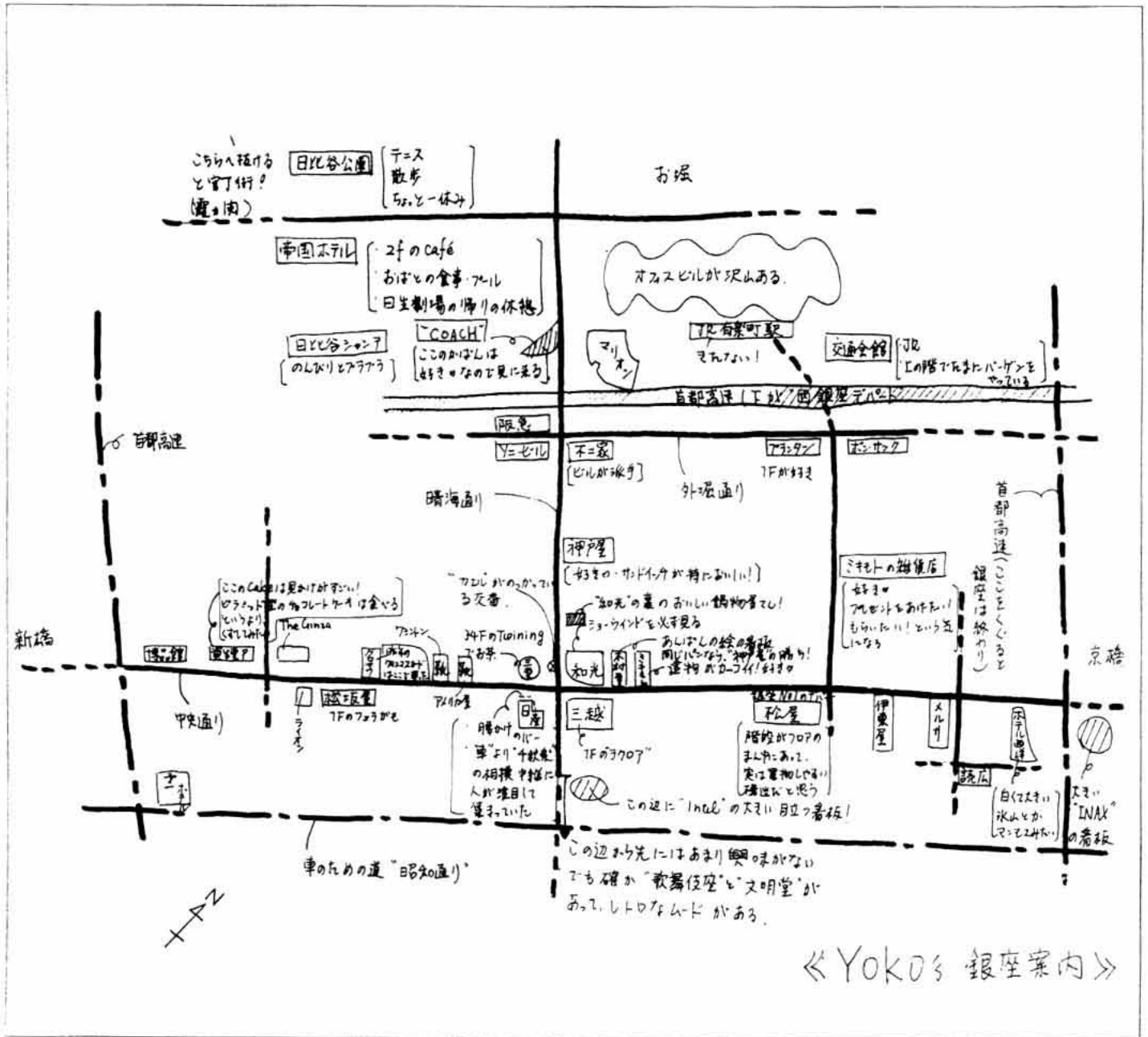


図6 私のの中の銀座のイメージ (鈴木)

「表通り以外は全然記憶がなくて、行くと分かるけど、描くと
なると描けないのが銀座だなという気がする。」

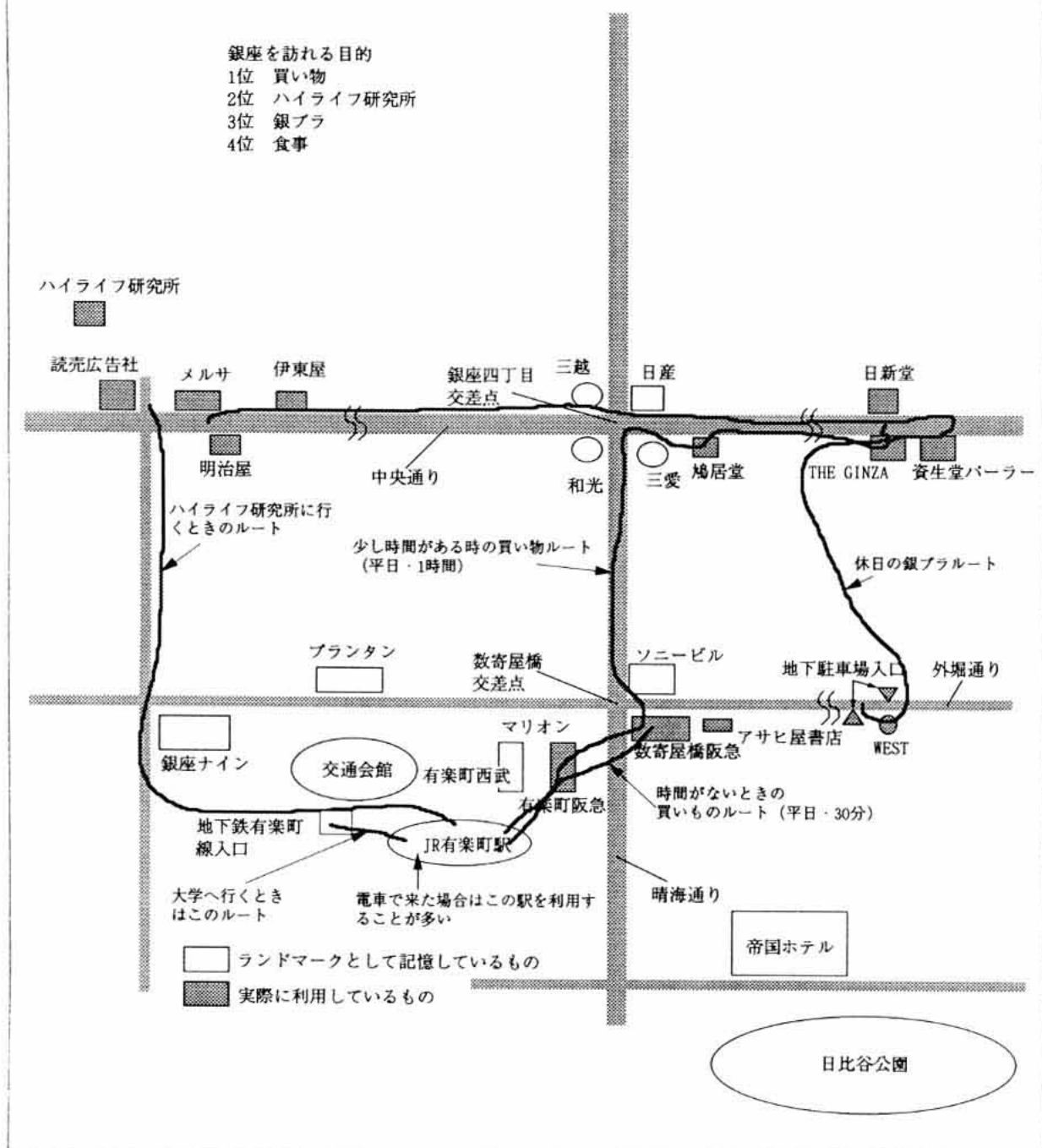


図7 銀座のイメージ図 (橋本)

「銀座は、なんとなく来る街ではなく、何かしたいという目的を持って来る街だと思う。この地図は気に入っているところ、目印になる所を記入したが、描いてみて自分の行動パターンが決まっていたことが分かった。」